

令和七年八月度 御報恩御講拝読御書

弥源太殿御返事

文永十一年二月二十一日

五十三歳

南無妙法蓮華經は死出しでの山やまにてはつえはしらとなり給たまへ。釈迦しゃか
仏ぶつ・多宝仏たほうぶつ・上行じょうぎようとう等の四菩薩しぼさつは手てを取り給たまふべし。日蓮さきに
立たち候そうらはゞ御迎おんむかへにまいり候事そうろうこともやあらんずらん。又またさきに行い
かせ給たまはゞ、日蓮かなら必えんず閻魔法王まほうおうにも委くわしく申もうすべく候そうろうこ。此ことすこの事少
しもそら事ごとあるべからず。日蓮法華經ほけきようもんの文もんの如ごとくならば通塞つうそくの案あん
内者ないしゃなり。只一心ただいっしんに信心しんじんおはして靈山りようぜんを期ごし給たまへ。

令和七年八月度 御報恩御講 『弥源太殿御返事』 (御書七二二頁一六行目〜七二三頁三行目)

【通釈】

南無妙法蓮華經は死出の山では杖とも柱ともなり、釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取ってくださるであろう。日蓮が靈山に先立つならば、お迎えに行くこともあろう。また貴殿が先にいかれるならば、日蓮は必ず閻魔法王にも委しく申し上げよう。このことには少しも嘘偽りはないのである。日蓮は法華經の經文の通りであれば、通塞の案内者である。ただ一心に信心に励んで靈山を願っていきなさい。

【主な語句の解説】

死出の山…人が死後に越えなければならない険しい山のこと。死の險難を山に譬えたもの。

釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩…法華經を説いた釈尊、釈尊の説いた法華經が真実であることを証明した多宝如来、釈尊滅後の法華經の弘通を託された上行・無辺行・淨行・安立行の四菩薩のこと。上行菩薩の本地は、久遠元初自受用報身如来である。

閻魔法王…冥界の王として人間の生前の行いを審判し、賞罰を決めるとされる。

通塞…ここでは、仏道の妨げ〔塞〕を取り除く〔通〕こと。

靈山…釈尊が法華經を説いた靈鷲山のこと。転じて、常に仏が法を説く清浄な国土（常寂光土）の意。靈山淨土。

【背景と大意】

本抄は、北条弥源太が自身の当病平癒の御祈念を願うため、日蓮大聖人に太刀と刀を御供養されたことに対し、文永十一（一二七四）年二月二十一日、大聖人が佐渡一谷（いちのさわ）で認められた御消息です。弥源太は北条一門の人で、文永五（一二六八）年には、諸宗との公場対決を迫る『十一通御書』のうち一通を送られています。この前後に、弥源太は大聖人に帰依したと考えられ、自身の大病をきっかけに信仰を深めました。

本抄では、まず一族すべてが謗法のなかを弥源太が大聖人に従い、法華經を信受するようになったことは、不思議な因縁であると示されています。そして、三世の諸仏が法華經を発心・修行の杖と頼ったように、弥源太はこれ以後、大聖人を杖・柱と頼んで一層強盛に信行に励み、成仏を願っていくよう諭されています。

また後段では、大聖人が天照太神ゆかりの安房国に生を受けた因縁を通して、親徳具備の一端を示されます。最後に、信心に怠りなく、必ず所願を成就するよう弥源太夫妻を励まされて本抄を結ばれています。